沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.47 No.1（通巻234号）

2022.6.25（年4回発行）

寄贈資料の中から

『東海道名所図会』

吉田町の榊原公幸さんから東海道に関する資料を寄贈していただきました。その中の１点を紹介します。

『東海道名所図会』は江戸から京都までの東海道に沿った各地の名所・旧跡や社寺仏閣などを紹介する、全６巻６冊からなる木版刷りの書物で、所々に名所や社寺、説話の場面を描いた画が挿入されています。

寄贈された本は奥付を欠きますが、寛政７年（1797）に京都の書肆田中庄兵衛が発行したもので、著者は秋里籬島、挿画は竹原華和泉斎等が分担しています。

上の挿画は、沼津宿郊外の千本松原に於ける六代御前（平六代・高清）助命の故事を描いたもので、その基になっているのは『平家物語』の記述です。平清盛の嫡流の曾孫に当たる六代は、平家の都落ちには同行せず、大覚寺近くに隠れていましたが、北条時政により捕えられ、鎌倉に連行される途次、千本松原で処刑されることになりますが、母の懇願により、鎌倉から頼朝の赦免状を携えて駆け付けた文覚上人の活躍により助けられます。

挿画の右上には連行してきた北条時政と同行する武士達、中央には手を合わせて祈る六代、その後には切人に選ばれたが、六代の幼いけなげな姿に切ることができないでいる狩野工藤三親俊、左下には、頼朝の赦免状を高く掲げて馬で駆け寄る文覚上人が描かれています。

同書には、現地に六代御前の石塔があると書かれており、同じ寛政年間に作成された『東海道分間延絵図』には千本松原の中に大木と石塔が描かれています。

万治３年（1660）頃の浅井了意の『東海道名所記』には「六代御前の石塔あり」と記され、五輪塔の図も挿入されています。天保14年（1843）の『駿国雑志』にも「六代御前墓碑、間門村松原にあり」として五輪塔の図を載せています。天保８年（1837）の『本町絵図』では松の大木と石燈籠が描かれ、「六代御前旧跡」とありますが、石塔らしいものは見られません。

現在、東間門の共同墓地の一画に、天保12年（1841）に建てられた「六代松碑」と刻まれた石碑があり、それには、此処に松の大木があったが枯れ、根の痕跡が残っていることが記されていますが、石塔は見られません。

駿河湾の漁

川口　洋司さんの漁話

ヨナワ（メカジキの延縄漁）　その１

今号からは獅子浜の網組である川口組の網元の一人として漁を行ってきた川口洋司さんの漁話です。

川口組は３軒のオヤカタと呼ばれた網元を中心に組織された組織で、最盛期には50人ぐらいの組員が所属しており、巾着網（旋網）で様々な魚を捕っていました。サバやイワシを捕るための巾着網は夜間に行う漁で、暗闇の中、灯りをつけてそこに集まる魚を巾着網で取り囲んで捕らえます。しかし、満月の日は夜中でも明るく、灯りの効果が薄いため、漁獲をあげることができないということで、満月の日を中心に一週間程度は網組での仕事はお休みとなります。このお休みのことをツキヤスミといいます。

このツキヤスミの時期は網組としての仕事がなくなるため、組員は臨時でできる他の仕事についていました。川口さんは弥助丸という小型の動力船を所有していたため、網組で行う巾着網で忙しい夏の盛りや、漁獲が減り、海が荒れる寒い時期を除くツキヤスミの期間は、少人数で行える漁を行ってきました。このような網組で行う大規模の漁が休みの時などに、副業的に行う小規模の漁のことをコショウバイと呼びます。

今回、語っていただいた漁はコショウバイとして行う漁の一つであるヨナワ（メカジキの延縄漁）です。ヨナワとは、夜に行うナワ（延縄漁）という意味です。夜に行う延縄漁は他にもありますが、静浦地区でヨナワと言えばメカジキの延縄漁のことを指します。

川口さんが狙ったカジキはカジキの中でも大型な種類であるメカジキです。成長すると体長4.5m、体重500kgに達しますが、ヨナワで釣り上げていたメカジキは、体長1.5m程度のメカジキでした。メカジキは普段は深い所にいるような魚ですが、月あかりのある夜は海面の方へ浮いてくるという性質があります。そのため、網組での漁が休みであり、しかも、満月の出るツキヤスミに行うコショウバイとしては最も適した漁でした。

川口さんがヨナワを行う時期は、初秋から晩秋にかけてになります。寒くなると深い所から浮いてこないようでメカジキが釣れなくなります。漁場は駿河湾湾口の中央に位置し好漁場として知られる石花海の東側になります。石花海には水深の浅い浅堆が２カ所あり、北側の浅堆をウラノセ、南側の浅堆をニヤノセと呼んでいます。沼津から遠いニヤノセまで行くと時間がかかるため、沼津から近い南側の浅堆であるウラノセ側を主な漁場としていました（図１）。

延縄とは、１本のミチイト（幹縄）にツリ（釣針）のついたエダ（枝縄）をたくさん結びつけた仕掛けです（図２）。ミチイトは120尋（約200m）を一まとまりとしており、５～６本のエダがついています。この120尋のミチイトをひとまとまりとして延縄籠（写真１）に納め、これを20～30籠を船に積んで出漁します。それぞれの籠に納められたミチイトは全てつながっており、仕掛けの全長は４㎞～６㎞もの長さになります。仕掛ける深さは15m～20mぐらいになるように調節します。延縄の仕掛けの両端、ひと籠分のミチイトと次の籠のミチイトとの間にはボンデン竿という目印をつけて浮かせます。ミチイトが張った状態であれば、エダが深く落ち込むことはありませんが、潮の流れなどの影響でミチイトがたるんでしまうとエダが海底についてしまう可能性があります。また、浅堆であるニヤノセに近づけすぎるとエダが浅堆に掛かってしまう可能性もあります。エダが海底についてしまうと、メカジキは餌を食わなくなるため、延縄を仕掛ける深さには注意を必要とします。　　・・・次号に続く

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）

図１：石花海の位置とヨナワを行う漁場

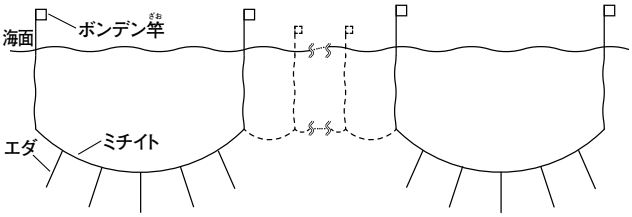


図２：ヨナワ操業図

写真１：ミチイトやエダを納める延縄籠
直径 600 ㎜×高 140 ㎜
歴史民俗資料館所蔵

『ふるさと沼津覚書』

加藤　雅功

■香貫・我入道編 その５ 我入道２

●狩野川河口部の伝承　きっと同じ臨済宗妙心寺派の永明寺と島上寺（永明寺の末寺）との関係からの類推であろう。対岸の沼津の蛇松側とはかつて我入道が繋がっていて、狩野川は東側から牛臥海岸に流れていたと言う。古く慶長16年（1611）の大洪水により永明寺の堂宇が流失し、寺運衰頽し元和年間に再興したことを知る。

その後の万治２年（1659）、己亥の年の洪水を人呼んで「亥の満水」と言う。狩野川台風並みの被害を上・下流で出し、未曽有の激しい洪水は下流の沼津でも、被害が顕著であった。この「亥の満水」で蛇松（下河原）にあった永明寺が流失し、その時に狩野川の流れが変わり、今のように西側に流下するようになったと言う。

以上はあくまでも永明寺側からの見方である。そうとすれば支流の江川の河口部から尼寺のある南条寺付近を経て、三貫地・山宮前に抜けるルートが想定されるが、果たして本当だろうか。

塩場水門のある高潮土手（汐除堤）を抜けるルートで北側に江川が流れ、吸干部（砂礫の窪地か）へ排水河川の塚田川が流れる幕末期の地図が存在する。ただし絵図では当該地域が変形されているが、今のルートで塚田川は、河口部が閉塞されており、古くからある池沼（フケ）が広めに描かれている。

『楊原村沿革史』での地勢に関する記述では、「伝云、往昔は黒瀬付近より派流をなし、本村の中央を通貫して、牛臥水門の辺に至り海に注ぎたりき、当時は海水此辺に彎入して、港湾の形状をなしたり」とある。伝聞と言うが、地名の「二瀬川」からの類推であり、狩野川が古くは黒瀬付近で２派に分流して、香貫の中央を経て牛臥の浜水門付近で海に注いでいたと言う。また河口付近は湾入していて、港湾の形状をしていたとも言う。これは定説のように語られる見方であり、浜水門付近の湾入部を港湾（古い湊）に利用できたとする。

●微地形と新田開発　河口部が分岐して分流する例は放水路は別として大変に少なく、山口県萩市の阿武川・橋本川などが典型である。当所が仮にそうであったとしても、耕地開発の関係からすると流下した時期は近世ではなく、中世であろう。

河口近くに湖沼や支流がある場合、洪水時に低い窪地に向け逆流現象によって「逆デルタ」（逆三角州）が形成される。特に塩場の集落がある善太夫新田の場合で見ると、微高地の形成と集落立地が理解しやすい。また我入道側の一本松や外新田の畑地の形成を考えた場合、逆流現象による荒蕪地でもあった可能性が高い。

微地形や土地割、用水・排水、新田開発や地名の由来、民間伝承等から勘案した結果からすれば、狩野川が牛臥山の東側を流下したとする見方は後退する。十分な河口部としての特徴であるはずの海側への開口部は存在しない。特に浜水門の位置する、不毛の意味である「フケ」の旧沼沢地部分からも、塚田川が排水不良の感潮河川であり、かつ逆流現象は常態的であった。島郷の「汐入」や「塚田」の地名が示すように、海水が満潮時には侵入する土地故の「汐入」であり、「塚田」の地名も排水不良地のツカッタ（浸かる田・地）に由来する。

もし河口が浜水門側にあれば、新田開発の対象地となる山宮前・浜田・柿原の「浜新田」や善太夫新田の前原・藤井原・樋ノ口・子ノ起・二貫地の田地は、開発の対象地にさえならない。劣悪な土地条件故に、海浜の高潮被害などを契機として、荒れ地・芝地を再開発して開拓した地である。

寛永10年（1633）の古文書に「香貫前の平浜、我入道村付之山宮前芝原、塩浜に相渡し候」とある。この年の地震によって善太夫新田では「塩浜」が破損している。すでに下香貫前の平浜や我入道字山宮前の荒れ地を、揚浜ではない自然浜（入浜系塩浜）の塩浜にすることが許可されている。平浜の「浜新田」の柿原・浜田の地にも「干潟浜」方式で塩田の成立が可能な環境にあった点から、やはり分流説も河口説も首肯できない。

地名説話や民間伝承の場合、史実とは異なるものが多い。確かに「ロマンはロマンとして残す」のも良いが、あまりに稚拙で非科学的なものも散見するので、合理的でないものは排除したい。

中堤から山宮前の田や島郷の松林を望む

魚見のある風景⑱　小海

右の絵葉書の写真は、内浦小海から内浦三津の小島の方向を見たものです。左端の集落の一番高い位置の建物は浄土真宗富海山敬願寺の本堂と庫裏のようです。中央の林の中には午頭天王を祀る八坂神社の社殿が見え隠れしています。集落中央の全面には船揚げ場が設けられ、10隻以上の漁船が引き揚げられて並んでいます。竹製のイキョを積んでいるものもあります。三津の小島には突堤のようなものが設けられています。

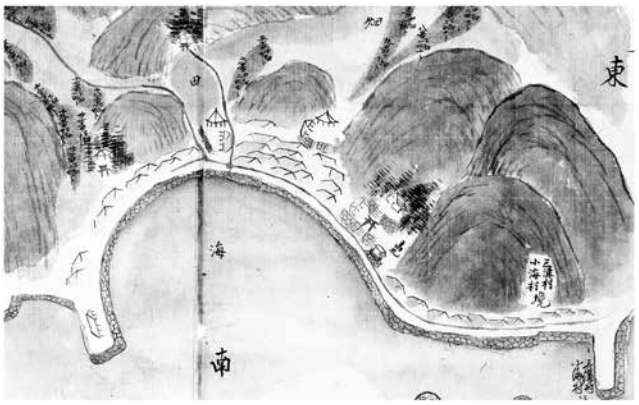
集落の建物は、多くは萱葺き屋根で、瓦葺きはまだ少ないようです。絵葉書の製作年代は大正期後半から昭和初期です。

中央の尾根先端には、松と見られる大木が立ち、その左下には丸太の柱を立てた櫓が写されています。拡大してみると櫓の上部は何かで囲われているようです。

『沼津内浦の民俗』の調査の際の聞き取りで、この位置には、小海のオオミネがあったことが分かっています。オオミネには漁期には人が常駐しますので小屋掛けがされています。聞き取りでは３畳位の広さの小屋があり、松の木も使われていたそうですが、その両方の役目をこの櫓がしていたと考えられるので、松の木から櫓に変わったと考えられます。八坂神社の入り口右側の崖には梯子のようなものが掛けられており、オオミネへの登り口かもしれません。

小海の集落の東端のカナサキの崖の上には、通巻202号⑤で紹介した、大きな松の木を利用した「シャーリーミネ」もありました。

絵葉書　伊豆内浦勝景　三津海浜全景　其二



小海村絵図（部分）　小海増田家文書　明治５年（1872）
魚見櫓は、左端の三津村小海村境と書かれた背後の尾根上に位置し、高札の左側が八坂神社、海と書かれたところがイエノマエの網戸場である。

資料館からのお知らせ

資料集・博物館紀要の発行について

令和４年度の「博物館紀要46」と資料集「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具Ⅲ解説２」を発行しました。

頒布も開始しておりますので、入手ご希望の方は館にお問い合わせ下さい。

館職員の人事異動について

４月１日の人事異動により、館長山田昭裕が退任し、新館長芹澤一男が就任しました。

よろしくお願いいたします。

沼津市歴史民俗資料館だより

2022.6.25 発行　Vol.47　No.1（通巻234号）
編集･発行　〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp